

概説： 琉球諸方言における係り結び研究の展開

日本学術振興会／国立国語研究所
林由華



目的

- 琉球諸方言で「係り結び」と目されてきた現象はいったいどんなものなのか、近年の調査研究によって何が明らかになっているのかをシェアする
- 琉球において「係り結び」に関連する形式が持つ性質を十全に記述するための項目を整理する

ゆくゆくは・・・

- 古典語も含め、共時的な性質に関する対照研究を可能にする
- そのうえで、通時的分析を行う

2

- 首里方言における「係り結び」の一例：

ハナー サチュン (花は咲く)

ハナヌドゥ サチュル (花が咲く)

サチュル ハナ (咲く花)

3

背景・動機 (1)

- 琉球には係り結びがあるとされてきたが、古典語との異同については必ずしも明らかではない
- 「係り結び」と目されるものの実態は地域によっても研究者によっても異なる (定義の問題、現象自体の多様性)

⇒「係り結び」とされてきたものの連続性と多様性をどう捉えることができるのか？

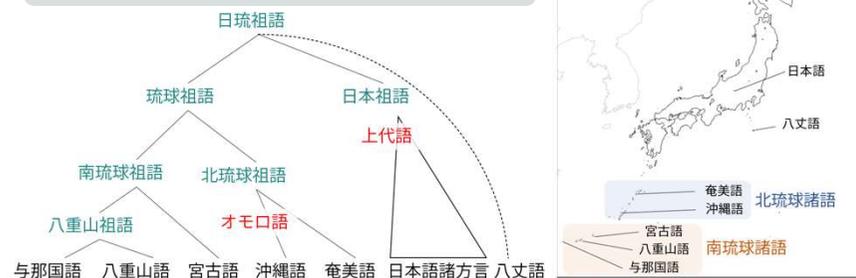
⇒古典語とは一旦独立して現象そのものを記述・整理する必要がある

4

背景・動機（2）

- 生きた言語として調査可能な現代方言の詳細な調査により、古典語研究に新しい視座をもたらすだけでなく、文献以前の日琉祖語における姿を再建する重要な手掛かりになる

琉球諸方言の系統関係と地理的關係
(ペラール 2013 などを基に作成)



ここでの「係り結び」の定義

■ (琉球の)係り結び (cf. 狭義係り結び)

係助詞【**焦点助詞**】+呼応する述語の非定動詞形（連体形など）【**結び形**】

※共通語になく、通言語的研究の中でも確立していないものをまとめているだけである可能性もあり、方言間・形式間に機能的な統一性があることは特に仮定しない。

- これが何故起こるのかを究明すべく、焦点助詞や動詞の結び形が関係する現象を広く「**係り結び関連現象**」もしくは「**焦点形式関連現象**」と呼び、観察対象とする

※「係り結び」が起こっているケースのみを観察するのではない

6

「係り結び」が持つ性格として必ずしも含めないもの

- × ある係助詞とある結び形は一対一関係として必ず共起する
- × 結び形は現役の連体形（・已然形）に限る
- × 形態論的な呼応関係である
- × とりたて表現である
- × 強調構文である
- × 分裂文である

7

形態面の整理

- 古典語との形式の対応関係
- 焦点助詞のバリエーション
- 結び形のバリエーション

8

古典語との対応関係

- Shinzato and Serafim (2013)
 - 日本語・琉球語を含めた最も詳細な係り結びの通時的研究
 - 琉球については沖縄首里方言（古典語・現代語）中心、文献資料によるものが主
- 上代語と古代沖縄語、現代沖縄語（首里）の係助詞の形式対応（新里 2018:288(3) を基に情報を追加して作成）

上代語	古代沖縄語	(呼応形式)	現代沖縄語	(呼応形式)
カ	カ	連体形	ガ (=ga)	推量形
ソ・ソ	ト・ド・ル・ロ (=du)	連体形	ドウ・ル (=du,=ru)	連体形、du結び形
コソ	ス (=si)	已然形	--	
ナム	--		--	
ヤ	終助詞のみ		終助詞のみ	

9

諸方言の焦点助詞の形式

- 発表者が扱う諸方言がもつ焦点助詞

	du対応形式	それ以外
奄美・平田	du	
奄美（徳之島）・井之川	du	
沖縄・津波	ru	
沖縄・名護安和	ru	
沖縄・首里	du	ga（うたがい形呼応）
宮古・池間	du	
宮古・長浜	du	ru (YNQ) , ga (WHQ)
八重山・宮良	du	
与那国	du	

10

述語動詞形式：結び形、連体形、終止形

- 北琉球
 - 古典語の連体形、終止形に完全に音対応する形式が基本的でない
 - 連体形とは別にdu係り結び形がある方言もある
- 南琉球
 - 連体形は古典語の連用形もしくは連体形と音対応する
 - 終止形は m 語尾と言われる形がある
 - ？連体形と終止形は同形である

	終止形	du結び形	連体形
沖縄・津波	hakkyun	N/A	hakkyunu
沖縄・名護安和	kacyun	kacyuru	kacyunu
沖縄・首里	kacyun	kacyuru	kacyuru
宮古・池間	--	kaci, kafu	kaci, kafu
宮古・長浜	--	kafu	kafu
八重山・宮良	kakun	kaku	kaku
与那国	kagun	kagu	kagu

11

諸方言の述語動詞形式とdu焦点助詞との共起関係

- 内間 (1985)
 - 琉球全域にわたる幅広い地域で、係助詞 (du, ga) と述語形式の共起関係を調査。内間自身は、「各方言でどれだけdu, gaが係り助詞として文末に係る力（述語形式を制限する力）を保っているか」という視点で整理している。
 - 主たる動詞形式として、「終止形」「連体形」「du係結形」をリスト。「終止形」には“系統を異にする”複数の形式がリストされていることもある。
 - 例) 古仁屋 (奄美) の終止形: kakyur, kakyum
 - 北琉球、特に奄美語では終止形・連体形も自由に du がある文の述語として表れているのが調査結果より見てとれる
 - 沖永良部島国頭 (奄美語)
 - dzi: du jumiru 「字ぞ読む」 (du係結形)
 - dzi: du jumimu 「字ぞ読む」 (終止形)
 - (cf. 連体形: juminu)

研究の広がり

- 機能面を考慮した共時的な研究が少ないことの問題
係り助詞（焦点助詞）とそれと共起する述語形の形式を見るだけでは、なぜそれが起こるのか、方言間の違い、古典語との違いなどはわかりにくい
 - “終止形”、“連体形”と呼びならわされているものがあったとしても、その機能や形式の出自には大きな方言差がある
- 最近の研究の展開の背景
 - 各方言における体系的記述研究の広がり
 - そのような詳細な調査研究を含む地点のバリエーションの広がり（特にこれまで手薄だった南琉球）

13

機能面の整理

最近の研究のレビューをしながら、

- 特にすべての方言が持っている**焦点助詞 du**の特徴を中心とした記述についてまとめる。
 - 焦点助詞は現代日本語にはなく、その性質の全容はまだよくわかっていないが、それと述語の関係（係り結び関係）を探るためにも詳しく見る必要がある。
- 焦点助詞および述語動詞形式のそれぞれには、
 - 情報構造
 - 文タイプをはじめとしたムード・モダリティ
 - とりたて

などが関わっており、それらすべての側面から検討する必要があることを示す。

※**どれか一つで現象が説明できる（一つの原理で起こる現象）**というわけではない

14

かりまた (2011)

- 琉球の広い範囲を射程に入れた係り助詞（焦点助詞）と述語形の関係について扱っている（対象方言：那覇方言、今帰仁方言、平良方言、石垣方言）。
沖縄語（北琉球） 宮古語（南） 八重山語（南）
- 主張の書き方として「係助辞によって述語形式が支配されることを係り結びだとするならば、**=du**を係助辞とみることはできない」（=琉球に係り結びはない）としているが、本発表の係り結びの定義に当てはまる事象は記述されており、その他の事象も含め事実の認識（記述内容）としては多くを共有している。

記述的に重要な知見も、また反証すべき一般化も含んでおり、ここではかりまた(2011)を基にして研究上の問題点や各研究を紹介する。

15

ここで取り上げるかりまた (2011)における観察・主張

- これまで係助辞といわれてきた形式は特定の活用形と必ずしも呼応しない
- 当該助辞の機能は焦点化である
- du はどの文タイプにも出現するわけではなく、制限がある。
- その方言に複数の焦点化辞がある場合、文タイプによってduとは異なる焦点化辞が選択される。
上記について、これまでの研究で多くの方言において確認されている。

本発表では、次の①～④について、かりまた(2011)とは異なる見解を示す諸研究を紹介しながら、**duや関係する述語形の性質を見る。**

- ① duは文中の特定の要素をとりたてる。(cf. 狩俣 2019) **【duと「情報構造」と「とりたて」】**
- ② duは「先行する文の部分にさしだされるものごとを焦点化」する。**【duの位置と焦点範囲】**
- ③ 焦点化助辞のはたらきと文のモーダルな意味を表現する述語形式とは独立している。**【duのもつムード・モダリティ性質】**
- ④ duは強調形（連体形と同形）だけでなく、断定形（終止形に相当）とも共起する。また、強調形は、duをふくまない文にもあらわれる。**【duと結び形／終止形との共起関係】**

16

① duと「情報構造」と「とりたて」

- 下地 (2015)、Shimoji (2018) など

琉球語全域での調査を基にして、焦点助詞の特性と方言差を調査。南琉球の宮古・八重山について、とりたて性を含まない、情報焦点を標する du があることが示されている。

- 「情報構造」と「とりたて」は異なる概念！「焦点」と「とりたて」も別のものである

17

Shimoji (2018)

- 主張：

琉球諸方言の du とその対応形式において、焦点タイプ (WH 焦点 vs. WH 応答焦点 vs. 対比焦点) と焦点ドメイン (項焦点 vs. 述語焦点) の 2 点について、以下の階層を提案

- (1) 焦点タイプの階層：対比 > WH 応答 > WH
- (2) 焦点ドメインの階層：項 > 述語

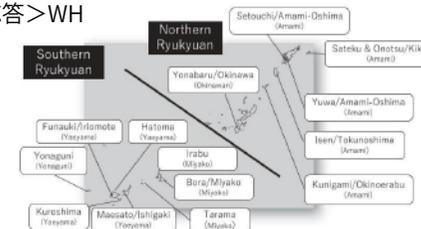


Figure 1. Sample languages in the present study

18

各焦点タイプと諸方言での現れ

- Shimoji (2018) より

	対比焦点 「自分じゃなくてアキラが壊した」	WH 応答焦点 「アキラが壊した」	WH 焦点 「誰が椅子を壊したの？」
小野津 (奄美) (100:(29))	wanoo araa [ak'ira]F =ŋa=du isoo k ^h uwačan=doo. (1SG=TOP COP.NEG.CVB Akira=NOM=FOC chair.TOP)	[ak'ira]F =ŋa k ^h uwačasu=do. (Akira=NOM broke=EMP)	[t ^h aru]F =ŋa isu k ^h uwačasu=yo? (who=NOM chair broke=Q)
国頭 (奄美) (105:(47))	waN=wa arazji [ak'ira]F =ga=du isu jabutaN=djaa. (1SG=TOP COP.NEG.CVB Akira=NOM=FOC chair broke=SFP)	[ak'ira]F =ga=du jabutaN. (Akira=NOM=FOC broke)	[taN]F =ga isu jabuti=joo? (who=NOM chair broke=Q)
伊良部 (宮古) (107:(50))	ba=a arada [ak'ira]F =ga=du is=su=baa javtar. (1SG=TOP COP.NEG.CVB Akira=NOM=FOC chair=ACC=TOP broke)	[ak'ira]F =ga=du javtar. (Akira=NOM=FOC broke)	[taru]F =nu=ga is=su=baa javtar=ga? (who=NOM=FOC chair=ACC=TOP broke=Q)

19

琉球における焦点タイプの区別

- 焦点タイプに関する発表者のスタンスについて

Shimoji 2018: Table 1 より

通常情報焦点の用法とされる

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
対比焦点的特徴	contrastive +	-	-
	exhaustive +	+	-
情報焦点的特徴	new information +	+	+

- WHA Focus を取れる方言とそうでない方言の説明として exhaustiveness が関わっているとすべきかどうかはまだ判断できない
- 発表者の分析の範囲では、現在のところ、情報焦点を表すかどうか (情報焦点/対比焦点の 2 項対立) で焦点タイプを区別している

20

「情報焦点」について補足

- 情報焦点が示せるとされる宮古八重山の方言では、形態論的な情報構造標示が義務的であり、例えばいわゆる前提のない発話である *thetic sentence* においても *du* が現れる

池間西原方言の例

kama=n=du **usi=nu** **uri** **ui**
 むこう=DAT=FOC 牛=NOM いる.CV PROG.NPST
 (牛がいることに気づいて) 「向こうに牛がいる」

21

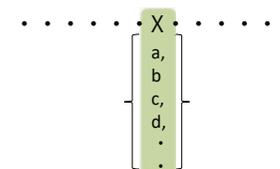
「情報構造」と「とりたて」の違い

- 情報構造：(定義にもよるが) 文中で焦点(新情報)となる部分と背景になる部分の区別。
- とりたて：文中のある要素が **コンテキストの中に対比要素を持つこと**。

情報構造



とりたて



- 対比焦点はとりたて性をもつが、情報焦点はとりたて性をもたない。

22

「焦点」と「とりたて」の違い

- 焦点 (≒新情報)、とりたて (≒対比、コントラスト)
- *du* は基本的に焦点を標示するが、とりたては関係しない場合もある。
 => 琉球の係り結びは必ずしもとりたて表現、強調構文というわけではない
- ただし、この2つは非常に連動しやすく、表現形式として区別しない言語もある
- 研究者、定義によっては、*focus* が実質 *contrast* と同じになっている場合もある (Repp 2016)

23

② *du* の位置と焦点範囲の関係

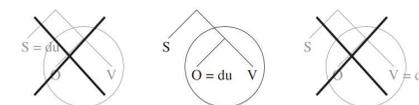
- Davis (2013)

“...*du* seems only to be able to occur attached **to the leftmost element within its associated focus domain...**”(p36-37 (17))

a. Broad scope



b. VP scope



- *du* が直接付与されている要素だけが焦点範囲となるのではない!

=> 意味的に分裂文と類似する可能性はあっても、統語的特徴として類似しているわけではない

24

Davis (2013)、デイビス(2013)

■ 具体例 (デイビス 2013 より)

述語句焦点

- a. ウヌ ミドゥンピウトー ノーバドゥ ヒー。
unu midunplto=o noo=ba=du hii
その 女の人=TOP 何=BA=DU した
'その女の人は何をしたの?'
- b. クヌ ミドゥンピウトー イズバドゥ ファイ。
kunu midunplto=o izu=ba=du fai
この 女の人=TOP 魚=BA=DU 食べた
'この女的人是魚を食べた。'

文焦点

- a. ノーンドゥ アリー。
noo=n=du arii
何=NOM=DU あった
'何があったの?'
- b. 林さんドゥ 次郎バ バリ。
hayasi-san=du zjiroo=ba bari
林さん=DU 次郎=BA 殴った
'林さんが次郎を殴った。'

25

③ duのもつムード・モダリティ性質

- 焦点助詞はムード・モダリティに関する特性を持っている (文タイプ制限、文タイプによる使い分けなど含む)。ただし、それだけで共起する述語形が一つに絞られるとは限らない。
- そもそも通言語的にも、焦点助詞が情報構造以外の特性を持つことはよく見られる (Matić and Wedgewood 2013)。

※ただし、かりまた (2011) でも、焦点助詞と文タイプの関連性については記述しており、事実の認識として大きな齟齬はない。かりまたは「文末形式の支配」ということについてはかなり厳密なもの (ひとつの焦点化助辞がひとつの動詞形式や文タイプを指定する) を想定しているため、ここと主張の形が異なっている。

26

duとムード・モダリティとの関係性

- Shimoji (2011)
宮古語伊良部方言の係り結びは、係り助詞がどれかひとつの述語形と呼応するのではなく、共起できない述語形がある (negative-concordance) という形で一般化でき。それは特定のムードを避ける形で起こる。: Quasi-Kakarimusubi
- 衣畑 (2016)
宮古語伊良部方言において、係助詞 ga (疑問詞疑問文専用焦点標識) は埋め込み疑問節の補文標識となるが、その際にも疑問文化の性質を保っている。
衣畑 (本日第3発表) => そもそも古典語の係り結びも含めて文タイプを指定するという側面から整理することもできる
- 占部・竹内 (2019)
八重山語の諸方言について、du と特定の文タイプの共起関係として、直説法 > 意志 > 命令 という階層を提案。古典語でも時代別に同様の傾向が見られることを示す。
- 林 (2019)
沖縄語のduは主節述語に一定のムード (強調法) を要求する

27

④ duの有無と終止形・連体形相当形式の出現

- 林 (2018)、林 (2019)、林 (本日第二発表)
 - duの有無と、連体形/du係結形、終止形が主節述語として出現することの関係性には、地域差がある。
 - これらの形式が情報構造上の対立を示す宮古八重山においては、duなし文に連体形相当形が現れたり、duあり文に終止形相当形が現れることはない。
- Hayashi and Takubo (2009), Takubo and Hayashi (2012)
 - 「連体形と終止形の区別がなく、したがって係り結びはない」とされていた宮古語 (内間 1985) の池間西原方言でも、(終止) 連体形は基本的に duなし文には表れず、duなし文には別の述語形が現れる。

(詳細は本日第二発表で)

28

琉球における係り結び関連現象（：発表者の考え）

- 焦点助詞が文全体、つまり主節述語形式に与える影響があり、かつその方言の述語側のパラダイムがそれにセンシティブである場合に、形式の選択制限となって表れる（林 2018）。
 - ・ とりたて詞が文末に与える影響と基本的に同類のものなのではないか。単に「とりたては現代日本語にあるので母語話者研究者が直感的に理解しやすい」？これらの影響を与えるカテゴリは現代日本語では少なくとも形態論上で義務的に表示しないので、直感的に理解しにくい。



- 北琉球などでは、方言によっては、単なる「形態論上の呼応」としたほうがいい場合もある（機能的な説明はつけにくく、とにかくひとつの構文として助詞と述語の形式を一致させている、など）。ただしその場合も、焦点助詞と述語形式の呼応が一対一対応にはならず、別の述語形との呼応も許される。
- 過去により厳密な呼応関係にあったものが、次第に助詞と述語形式のそれぞれが独立に機能を獲得していった結果、制限が緩んでいった可能性はある。

29

方言間対照研究がこれまであまり進んでいなかったのは何故か？

- 現代日本語にはない要素、また通言語的にも比較的珍しい現象を含んでおり、すぐに適用できる分析の枠組みがない。

例) 「情報焦点」を表す助詞、文タイプや情報構造による述語動詞形式の使い分け

- 複数の文法カテゴリが関わる複雑な現象であり、それぞれの方言における詳細な研究が前提となる。

情報構造、(広義)モダリティ(文タイプなど)、とりたて

- これらの概念、とりわけこれらの相互のつながりについては、そもそも言語学の研究界全体としても十分に整理されていない。

30

まとめ：焦点助詞を含む焦点構文として記述すべきこと

- 焦点助詞としての性質
 - ・ 焦点助詞が情報焦点を表すかどうか（「とりたて性」の有無）
 - ・ 焦点助詞が付与される要素と、付与される位置と焦点範囲の関係
 - ・ 焦点助詞が出現できる（指定する）文タイプ
- 述語形式との関係
 - ・ =>第二発表へ

など

これらの項目を総合して、その方言のdu焦点構文（du係り結び）の性質についての各方言における性質を整理することで、比較対照、詳細な通時研究が可能となる

- 助詞と述語を独立させて見ることで、通時変化（衰退、バリエーション発生）において何が運動しているか（いないか）も観察することができる
- 通時の変化を見るうえで、妥当な機能的なモチベーションを与えられる

31

琉球諸方言における「係り結び」とは？

- 本発表で示した焦点助詞と述語の関係の一部として性格づけることができる。

古典語との関係について

- 琉球の du は焦点助詞といえるが、古典語については「ゾ・ナム・ヤ・カ・コソ」すべての係助詞を焦点助詞と見なせるわけではないかもしれない。

- 古典語とどの程度相同性があるのかはまだ明らかでないが、お互いに知見・分析の道具を生かし合い、対照研究を行うことが可能。

- 歴史的なつながりを見るためにはまず琉球内での再建が必要。

32

引用文献

- デイビス, クリストファー (2013)「八重山語宮良方言のduの統語上の位置と意味範疇」発表資料、若手研究者による国際ワークショップ・琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究、京都大学 (2013年2月19日-20日).
- Davis, Christopher (2013). Surface Position and Focus Domain of the Ryukyuan Focus Particle du: Evidence from Miyara Yaeyaman, IJOSInternational Journal of Okinawan Studies.4.1:29-49.
- 林由華 (2017)「南琉球宮古語池間西原方言におけるdu焦点構文と述語焦点形」『阪大社会言語学研究ノート』15:87-99.
- 林由華 (2018)「係り結び現象を生む述語の機能—通方言的な視点から」日本語学会第156回大会、東京大学 (2018年6月)
- 林由華 (2019)「動詞結び形を持たない方言における係り結び関連現象：沖縄本島北部津波方言を中心として」日本方言研究会第108回研究発表会、大阪大学 (2019年5月17日) .
- かりましたげひさ (2011)「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』7(4):69-82.
- 狩俣繁久 (2019)「琉球語のとりたて表現」野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』77-95くろしお出版. 衣畑智秀 (2016)「南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び—伊良部集落方言を中心に—」『言語研究』149: 1-24.
- Matic,Dejan and Daniel Wedgwood (2013). The meanings of focus: The significance of an interpretation-based category in crosslinguistic analysis. Journal of Linguistics, 49:127163.
- ペラール, トマ (2013)「日琉祖語の分岐年代」wa琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」発表資料、若手研究者による国際ワークショップ・琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究、京都大学 (2013年2月19日-20日).
- Repp, Sophie (2016) Contrast: Dissecting an elusive information-structural notion and its role in grammar. In Caroline Féry & Shinichiro Ishihara (eds.), Handbook of Information Structure, 270-289. Oxford: Oxford University Press.
- Shimoji, Michinori (2011) Quasi-Kakarimusubi in Irapu. In W. McClure and M.Den Dikken (Eds.), Japanese/KoreanLinguistics, 18:114-125. CSLI Publications.
- 下地理剛 (2015)「焦点化と格標示」『日本語学会151回大会予稿集』396-401.
- Shimoji, Michinori (2018) Information structure, focus, and focus-marking hierarchies in Ryukyuan languages. Gengo Kenkyu 154: 85-121.
- Shinzato, Rumiko and Leon A. Serafim (2013). Synchrony and Diachrony of Okinawan Kakari Musubi in Comparative Perspective with Premodern Japanese, Kent, UK: Global Oriental/Brill.
- 新里理英子 (2018)「古代語の係り結び・現代語のノダ構文・沖縄語の係り結びの比較」高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房.
- 内間直仁 (1985)「係り結びのかりの弱まり：琉球方言の係り結びを中心に」、『沖縄文化研究』11: 223-244.
- 占部由子・竹内史郎 (2019)「焦点標識とモダリティ：南琉球八重山語の=duと古典日本語のソを例に」研究会「係り結び関連現象の通言語的研究に向けて」、大阪大学 (2019年12月24日) .

謝辞

本研究は、下記の助成金を受けています。

JSPS 科研費 17J10117 「琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明」

JSPS 科研費 19H05354 「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」(新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」公募班)

また、調査にご協力いただいた話者の皆様、話者の方々との間を繋いでくださった皆様に、心より感謝申し上げます。